

資料配付			
月／日（曜日） 時間	担当課・係 TEL	発表者名 （担当係長名）	その他配布先
2月15日（金）	兵庫県教育委員会事務局 文化財課 文化財班 （直通）078-362-3784	文化財課長 山下 史朗 副課長兼班長 熊谷 久男	淡路市記者クラブ

## 平成30年度淡路市舟木遺跡の発掘調査成果および現地説明会について

### 1. 発表概要

淡路市教育委員会では、市内に所在する弥生時代の遺跡である舟木遺跡の発掘調査を進めています。

平成30年度の調査では、尾根の頂部から、鉄器や砥石が出土した竪穴建物跡1棟が見つかっています。また、今回の調査では、絵画土器や独特の器台形土器など弥生人の精神文化を理解する出土品が見つかっています。これらの成果を公表するため、現地説明会を開催します。

#### 【記者発表】

日時：平成31年2月15日（金）10：00～

場所：震災記念公園 セミナーハウス 会議室（淡路市小倉177）

TEL：0799-82-3400

#### 【現地説明会】

日時：平成31年2月23日（土）13：30～16：00（雨天中止）

場所：舟木遺跡 平成30年度発掘調査現場

### 2. 問い合わせ先

淡路市教育委員会 社会教育課文化財係 0799-64-2520（直通）

担当 伊藤 宏幸・新田妃三光

兵庫県教育委員会事務局 文化財課 文化財班 078-362-3784（直通）

担当 永恵裕和

発 表 概 要	
発表事項	平成30年度舟木遺跡の発掘調査成果及び現地説明会について ～ 淡路市国生み研究プロジェクト成果発表 ～
発表日時	平成31年2月15日（金） 10時00分
発表場所	震災記念公園 セミナーハウス 会議室 淡路市小倉 177 TEL. 0799-82-3400 FAX. 0799-82-3401
担 当	淡路市教育委員会 社会教育課
TEL・FAX	TEL 0799-64-2520 FAX 0799-64-2566
発表者	淡路市教育委員会 文化財活用等担当部長 伊藤宏幸 社会教育課 課長 桑島久純 課長補佐兼文化財係長 山田尚子 文化財係 主査 新田妃三光
コメント	各学識経験者のコメントに対する質問には、以下のとおりご対応 いただけます。  ○和田晴吾（兵庫県立考古博物館 館長・舟木遺跡調査検討会 会長） 携帯電話でご対応いただけます。 TEL. 090-9114-6272（携帯）  ○森岡秀人（関西大学大学院 非常勤講師） ご自宅の電話は下記時間帯、メールは常時ご対応可能です。 15日：午後8～11時 16日：午前9～11時 18日：午前9～11時、午後7～11時 19日：午前9～11時、午後9～11時 20日：午前9～10時 TEL. 0797-23-6674（自宅） E-mail:morioka_0223@yahoo.co.jp  ○浦上雅史（洲本市立淡路文化史料館専門委員） ご自宅の電話でご対応いただけます。ご対応は、18・19日です。 TEL. 0799-22-0049（自宅）
解禁日時	新聞 平成31年2月21日（木） 朝刊 ラジオ/テレビ 平成31年2月20日（水） 17時以降 インターネット //
その他	調査成果は、下記のとおり現地説明会で公表します。 日時：平成31年2月23日（土）13：30～16：00（雨天中止） ※ 雨天の場合は、当日午前10時に開催の有無を決定します お問い合わせ：淡路市教育委員会 社会教育課 文化財係 TEL. 0799-64-2520 場所：舟木遺跡 平成30年度発掘調査現場 内容：平成30年度発掘調査成果及び出土遺物の公開

### 平成30年度 舟木遺跡の発掘調査成果について ～ 淡路市国生み研究プロジェクト成果発表 ～

#### 1. 経緯

平成27年度から進めている“淡路市国生み研究プロジェクト”は、古代国家形成の原点ともいえる弥生時代における島の歴史を、北淡路の丘陵部に急増する弥生時代後期の遺跡群の調査をとおして解明しようとするものです。今年度の調査は、同プロジェクトとして4年目、発掘調査は3年目を迎えます。

その中心となるのが、舟木遺跡の重点調査です。舟木遺跡は淡路島を代表する弥生時代の遺跡で、海の民との関わりが深く、平成28年4月に認定を受けた日本遺産ストーリー『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」の構成文化財にも選ばれました。

平成27年度は、出土遺物の再整理によって中国鏡片を確認しました。平成28・29年度の発掘調査では、弥生時代の鉄器工房を確認し、近畿で初となる鉄製のヤスなどの貴重な発見がありました。

本年度は、28・29年度に調査を行ってきた尾根（D地区）の北向かいの尾根（B地区）を新たな対象地として調査を行いました。その結果、この地区においても弥生時代後期の竪穴建物跡1棟を検出し、床面から鉄器や砥石などが出土したことで、舟木遺跡での鉄器利用の広がりを確認することができました。また、発掘調査と並行して進めている出土遺物の整理作業では、これまでの調査で出土した土器の中に、弥生人が絵を描いた絵画土器や他の地域から持ち込まれた搬入土器など、貴重な資料も確認されており、舟木遺跡の弥生人の営みや集落構造、他地域との交流関係などが明らかになってきました。

その成果について現地説明会を開催し、一般に公開させていただくこととしましたので、それらのことについて、下記のとおり発表いたします。

#### 2. 主な成果

- ・新たな地区（B地区）において、建物跡1棟を検出。床面から、鉄器や砥石などが出土。
- ・絵画土器や独特の器台形土器など、弥生人の精神文化を理解する貴重な資料を確認。
- ・北近畿や河内など、他地域との交流の広がりを示す土器を確認。

#### 3. 平成30年度発掘調査の概要

- ① 遺跡名： 舟木遺跡（ふなきいせき）
- ② 時代： 弥生時代後期 ～ 終末期
- ③ 調査主体： 淡路市教育委員会
- ④ 調査面積： 約134㎡（2m幅・1m幅のトレンチ6か所）
- ⑤ 調査期間： 平成30年9月18日 ～ 平成31年3月（予定）
- ⑥ 検出遺構： 竪穴建物跡 1棟

B地区の尾根頂上部で、弥生時代後期の竪穴建物跡1棟を確認しました。昨年までのD地区尾根の前面に位置する尾根上でも鉄器を用いた暮らしが広がることが明らかになりました。

発見された建物跡は、直径は5.6m、床面積が約24.6㎡の規模となります。中央には、直径約90cm、深さ30cmの中央土坑と呼ばれる穴が掘られています。その周辺から鉄器や砥石が出土しました。

B地区尾根での鉄器の発見は初めてのこととなります。舟木遺跡での鉄

器の使用が本地区にも広がるのが確実となり、広大な面積を有する集落内の構造、人々の暮らしの様子を知る、貴重な資料となります。

⑦ 出土遺物： 弥生土器、鉄器、砥石など

#### 4. 平成30年度出土遺物調査の概要

① 調査期間： 平成30年4月2日～平成31年3月29日（予定）

② 成果： 本年度は、発掘調査と並行して、これまでの発掘調査で出土した遺物整理も行ってきました。

##### ・ 絵画土器の確認

平成28年度発掘調査出土土器の中から、土器の表面に線刻画を描いた絵画土器の出土を確認しました。淡路島内では3例目の貴重な資料となります。一辺が約3cm×4cmの破片であるため、絵の全容は不明ですが、直線が交差する構図から、高床の建物が描かれている可能性が高いと考えられます。

絵画土器は、土器の表面に線刻画を描いたもので、鹿や建物、鳥、人物などが描かれる例が多く、弥生人の祈りを込めたお祀りに用いられたものと考えられています。

主なものとしては唐古鍵遺跡（奈良県田原本町）の高床の建物や鹿などがあります。淡路島では、いずれも弥生時代後期の例として、飛谷遺跡（洲本市五色町）、五斗長垣内遺跡（淡路市）があり、今回の土器で3例目となります。

後述の器台形土器などと合わせて、舟木遺跡の人々の祈りや精神文化を理解する上で、重要な資料となります。

##### ・ 器台形土器

他の遺跡では例をみない独特の器台形土器があることを確認しました。一見、当時の鉢の形をしていますが、底部が中空であり、中央部に直径3～5cmの円形の穴が開いています。外面に叩きの成形痕を残すものと丁寧にナゲ消すものとの2種類があります。過去の出土遺物も含めると合計8点確認されました。

器台形土器もお祀りに使用した土器と考えられています。今回確認された器台は、今のところ舟木遺跡以外ではあまり例を見ない形の土器であることから、舟木遺跡の人々が独自色の強いお祀りを行っていた可能性を示す資料となります。

##### ・ 他地域からの搬入土器

他の地域で作られ、舟木遺跡に持ち込まれた土器を搬入土器と呼びます。舟木遺跡では、河内で作られたとみられる大きな壺や北近畿系の特徴を持つ器台形土器など、他の地域で作られた土器が何種類か確認されました。これらは、舟木遺跡の人々が持っていた他地域との交流やネットワークを知ることができる重要な資料となります。

## 5. 評価

本年度の調査では、B地区尾根上にも鉄器使用の広がりを知ることができる竪穴建物跡を検出し、集落内での人々の暮らしの様子を知ることができる貴重な資料となりました。平成28・29年度に調査を行ったD地区尾根で確認されていた工房を中心としたエリアと祭儀を行っていたエリアを区分する土地利用のあり方とも考え合わせると、広大な面積を有する舟木遺跡の中で、多様な機能を有する空間が存在する集落構造の一端を明らかにすることができる重要な調査成果となります。

また、その中で確認された絵画土器や他の遺跡では例をみない独特の器台形土器の存在は、舟木遺跡の人々の祈りやお祀りの様子を知ることができる資料となります。特に、今回確認した絵画土器は、平成28・29年度、D地区で確認している祭祀的様相の強い土器群とともに出土しており、D地区南尾根上に居住空間や工房空間とは異なる祭祀的空間があったことを補強する資料になるものと考えられ、舟木遺跡の集落構造を知る上でも重要な資料となります。さらに、他には例をみない器台形土器の存在は、舟木遺跡の人々の独自色の強いお祀りを想定させるものでもあり、今回確認した絵画土器や昭和40年代に発見されている大形の器台形土器なども併せて、舟木遺跡のお祀り（祭祀）のあり方などを知ることができる重要な成果と考えられます。

さらに、舟木遺跡では、平成29年度の調査で出土した鉄製のヤスや釣り針などから、鉄器の流通に海民集団のネットワークが深く関わるということが想定されていました。今回の調査で確認された他地域からの搬入土器は、舟木遺跡と具体的に交流のあった地域を知ることができる貴重な資料となります。特に、北近畿系土器の出土は、これまでに想定されていた瀬戸内の海を介したネットワーク以外にも、本州を経由する南北の交流があったことも想定させる資料であり、舟木遺跡のネットワークの広がりを知ることができる貴重な資料と考えられます。

このような調査の成果から、舟木遺跡は集落構造や精神文化、地域間交流やそれを背景とした物資の流通などの面で、周辺の他遺跡とは異なる多様な機能を有する中心的な役割を担う遺跡であることが明らかになってきたといえます。



北淡震災記念公園セミナーハウス 及び 舟木遺跡位置図

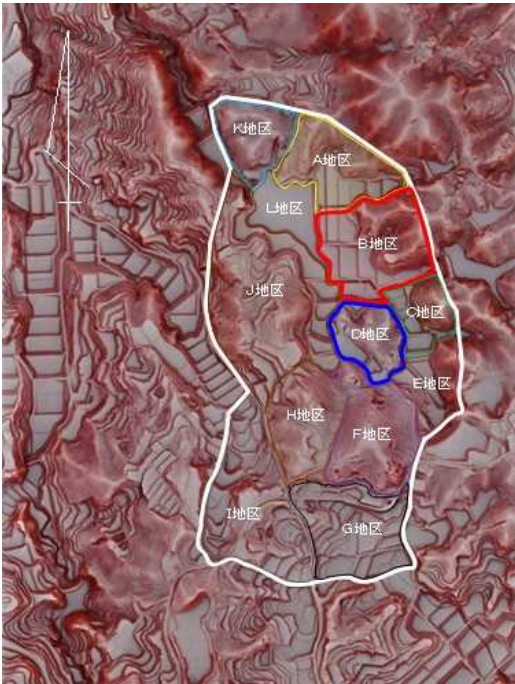


図1 舟木遺跡 地区割り図



- : 平成 30 年度竪穴建物位置
- : 平成 28・29 年度竪穴建物位置
- : 絵画土器出土位置

図2 舟木遺跡  
発掘調査地拡大図



図3 舟木遺跡調査地 航空写真

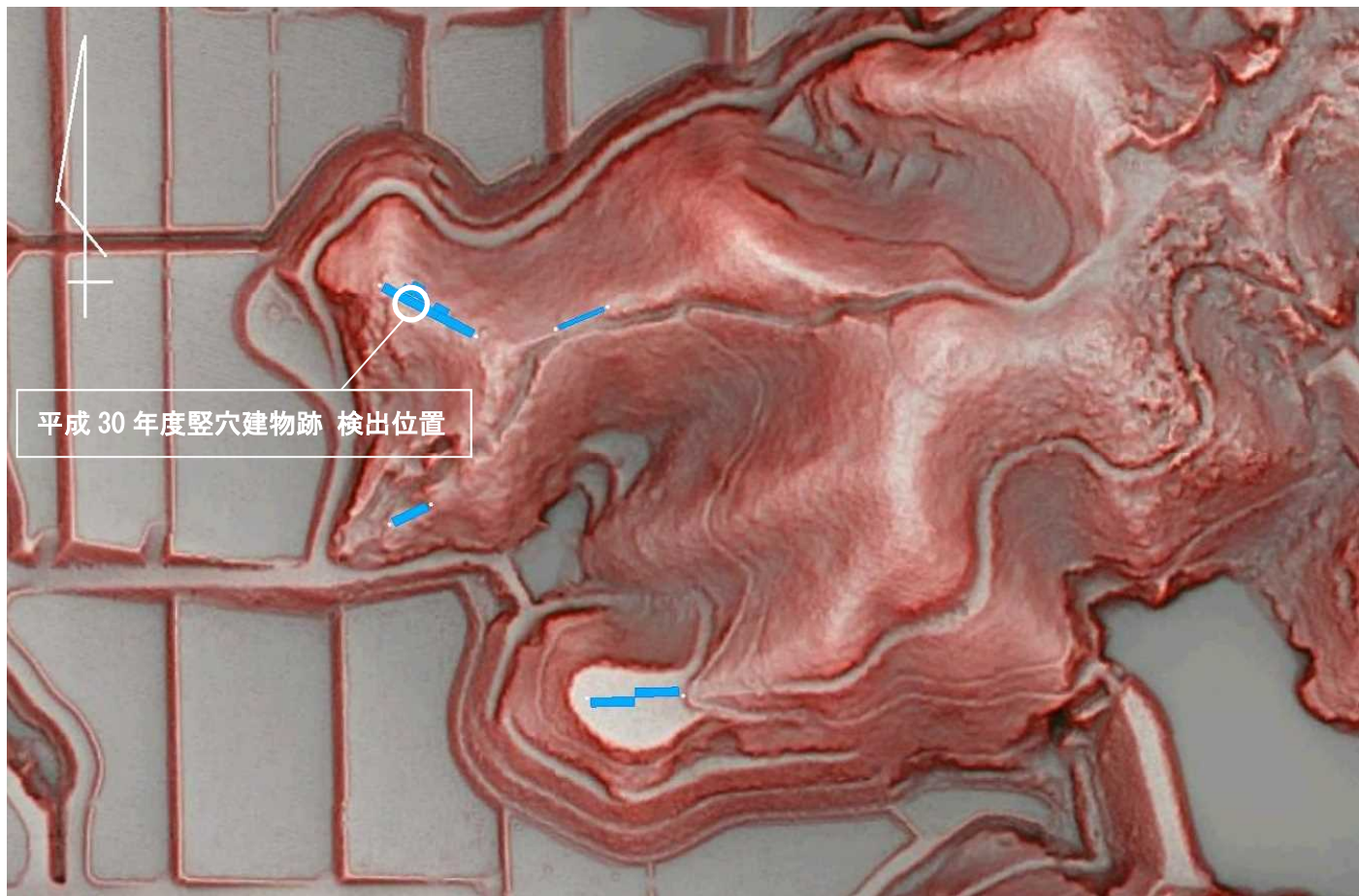


図4 平成30年度調査区配置図



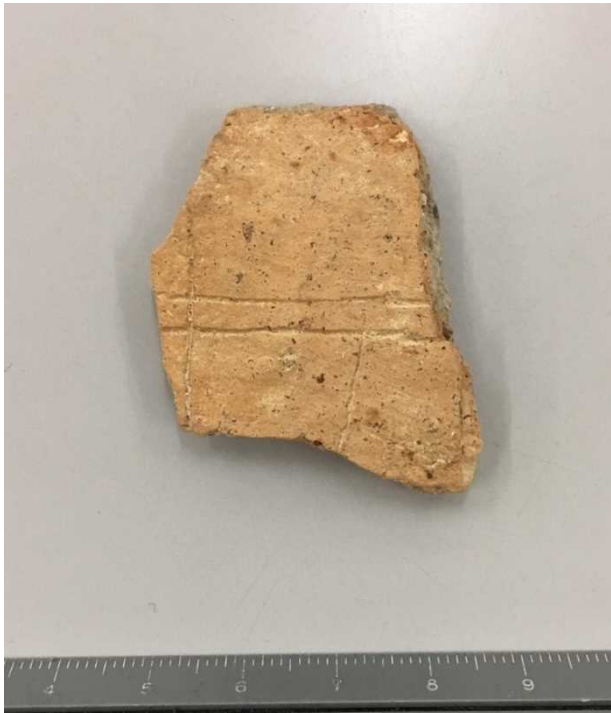


図5 絵画土器

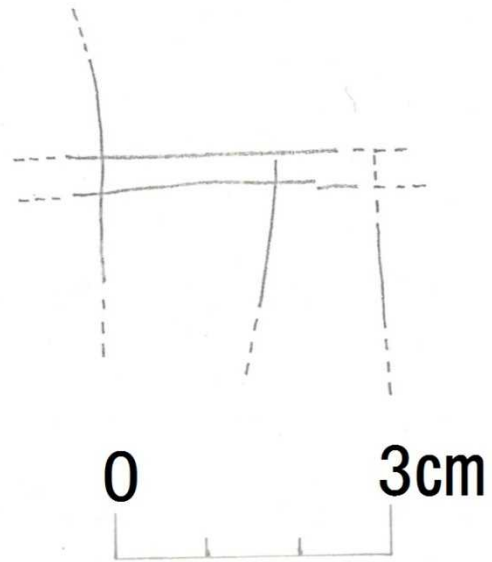


図6 絵画復元図

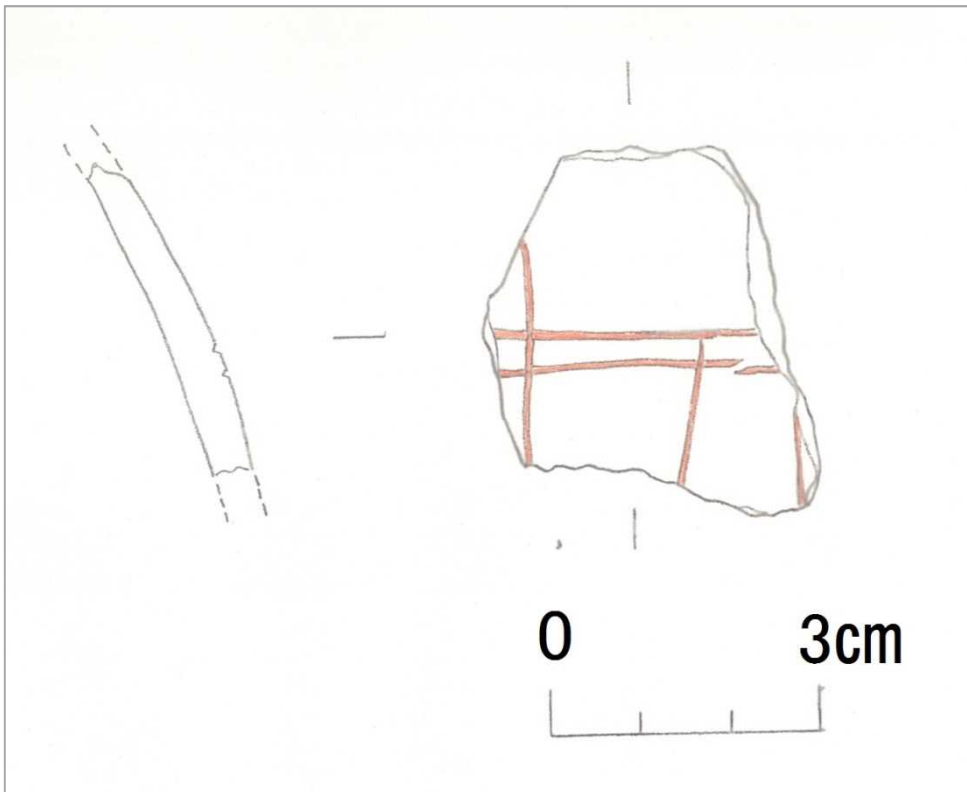
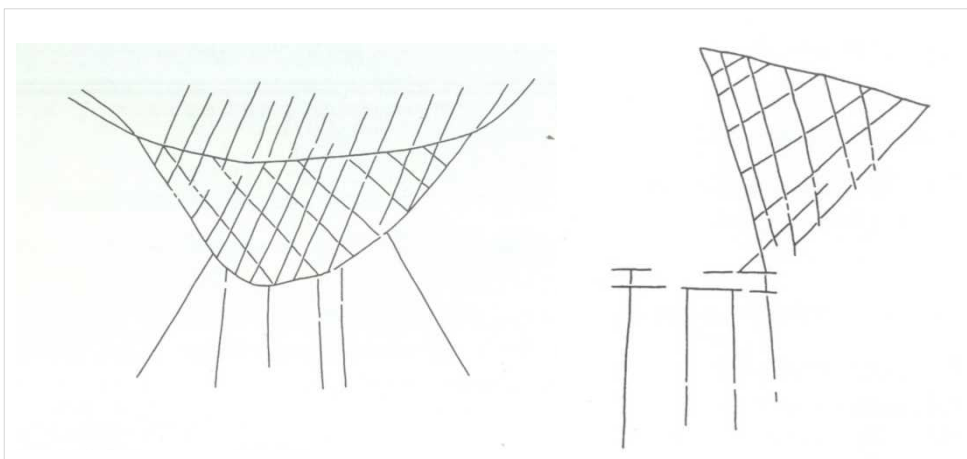


図7 絵画土器実測図



【参考資料】

図8 飛谷遺跡出土絵画土器  
春成秀爾氏による復元絵画

1999『ごしきの遺跡』

五色町教育委員会 所収



図9 北近畿系土器



図10 平成30年度 竪穴建物跡出土鉄器



図11 器台形土器



## 配布資料 4

淡路市・舟木遺跡発掘成果へのコメント（2018年度）

和田 晴吾

- ・ 今回の発掘調査でも、竪穴建物跡から鉄器や砥石が出土し、舟木遺跡が弥生時代後期～終末期にかけの鉄器鍛冶遺跡であることが、より確実になった。
- ・ この時期は、日本列島で初めて、近畿中央部（畿内）を中心とした国家的なまとまりが形成されはじめた時期にあたり、中枢勢力にとっては、朝鮮半島南部からの鉄素材の入手ルートをおさえ、鉄器生産の主導権を握ることはきわめて重要な課題であった。
- ・ したがって、瀬戸内海ルートの東端で、近畿中央部への入口にあたる淡路島において、五斗長垣内遺跡につづいて、大規模な鍛冶遺跡が見つかり、その内容が徐々に明らかになっていくことは、淡路島の地域史のみならず、日本史的意義をもつ。
- ・ 国の史跡指定を目指すこの間の発掘調査により、遺跡に範囲、内容などが明らかになってきたことはたいへん喜ばしい。
- ・ 出土した遺物から、この遺跡の人たちの生業をはじめとする生活の実態が明らかになるとともに、土器などの検討から、その活動・交流の範囲が広域にわたることが解明されるものと期待している。

## 配布資料 5 - 1

### 淡路市舟木遺跡平成 30 年度新地区の発掘調査成果に関するコメント

2019 年 2 月 5 日

関西大学大学院非常勤講師（考古学）

森岡 秀人

兵庫県淡路市では、平成 28 年度から舟木遺跡の解明と国史跡指定を目指した学術的な発掘調査を続けているが、本年度は既往調査時点から注目されていた B 地区の丘陵地にトレンチを設け、過去の調査で不分明であった遺構の再検証や新出の遺構の内容や性格を明らかにしようとしている。設置されている「調査検討委員会」の委員として現場を検証したので、下記のとおり、その調査成果に関する学術上のコメントをおよそ三点に絞り込んで、以下に記述する。

○新たに発掘された鉄器は薄いものの、折り返し部のみられる製品と思われ、摘み鎌のようなものの破片になるかもしれない。詳細分析の必要がある。本遺跡は、近畿地方において古墳出現期の大掛かりな鉄器生産を担う重要な遺跡で、近畿では弥生後期の一般集落が鉄器生産活動を終えたのちも、庄内式期にかけて製作の形跡をとどめる重要な遺跡である。各所で鉄器や青銅器（中国後漢鏡片）なども出土している。規模は大きく、淡路島の沿岸部からは山間の中に入り込んだその立地条件、自然環境も非常に特異な遺跡である。

今年度の調査は昨年度の調査とは地区や目的を変えた確認調査を実施しているが、鉄器とともに鉄器製作の砥石も出土した意義は大きい。この地区にも複数の鉄器工房が存在したと考えよいのではないか。製作堅穴があるとしてよい。土器は少なく、生活臭は乏しい。地区ごとに経営や盛行の時期差を有する可能性があり、併せ進められている遺構単位の土器の分析が精度の高い集落の複合的な消長を教えてくれるだろう。

○精緻な素地土で作られた土器片に線刻が認められ、記号・符号ではなく、絵画土器の一部と考えられる。絵画の施された土器の少ない淡路島で絵画土器が確認された意義は大きい。3 例目となる。南部では撥形図文なども最近検出されている。本例は繊細な線刻であるが、はっきり捉えることができ、建物絵画の柱表現などの一部ではないかと考えている。特徴的なもので、土質や色調から搬入品の蓋然性が大きい。時期は弥生時代後期のものであろう。絵画土器は一般に甕や鉢には少なく、壺には多く認められる。近畿中枢部から招来されたものであろう。

○過去の出土土器の中に人的交流を窺わせる北近畿系の土器や河内産の土器が確認されている。舟木遺跡が地形に則した閉鎖的な集落ではなく、淡路島の位置を考えれば、海を隔てた遠隔地との交流を想起させる。ただし、絶対量が少ないため、日常生活に密着した多

## 配布資料 5 - 2

人数の交流ではなく、はっきりした目的を持つやや特化した交流とみてよい。北近畿系とした土器は日本海に面する丹後産のものではないが、南下で中継する丹波地域や東播磨・西摂津などを射程に入れることができ、近畿における南北の流通軸、交通軸の南端を淡路が占める珍しい動きが判明してきた意義は大きい。器種は擬凹線文系土器様式の器台であり、擬凹線の施文手法は山陰や北陸のものとは異なる。北近畿系の土器は、器台・高杯など墳墓祭祀に用いられるようなものが中心であるが、経由地では在地化も早く、日本海に面する丹後からの直接的な搬入品ではないが、擬凹線技法は比較的精緻であり、中継地の中では最南部に南下してきたものではない。明らかに淡路の舟木遺跡で製作された在地品とは異なっており、薄い器壁で比較的シャープな作りをなす。播磨灘—明石海峡を渡って流入する土器の出自の淵源が北近畿に辿れた意義は大変大きい。

仮に鉄器の生産活動を踏まえて考えた場合、その様相の影響を受けることも多分にあり、今後の検討課題となるだろう。本遺跡は弥生時代後期最初頭から始まり、弥生時代終末期や古墳時代前期初頭に比定される庄内式期の時期まで衰退せず、継続している。しかし、近畿中央部の纏向遺跡などで鉄器生産が本格化する布留式段階には繋がることなく終焉する。五斗長垣内遺跡の鉄器生産工房群とは重なりつつもそれに後出する時期にも存続し、かつ役割も大きく異にする点が特筆される。そのありようは、播磨灘の内海に対する面し方、鉄器の品目・生産内容、集落の多機能性などいくつもあり、二つの遺跡が同じタイプの集落でない点が特記されよう。

淡路島北部で確認される北近畿系の高杯・器台は丹後・丹波地域の西谷 2 式土器に併行するものであり、後期後葉～末葉に位置付けられ、およそ 2 世紀後半を中心とする時期のものである。その下限付近に赤坂今井墳丘墓のような複数埋葬ながら大きな厚葬墓が現れる画期があり、北近畿勢力肥大の時間的到達点の一つが押さえられる。島外でも北からの影響力が祭祀土器に認められることは評価すべきである。

○生産鉄器については、B 地区で摘み鎌状鉄器、昨年度調査区のヤス・モリ様のものや釣針が認められ、海人と関わる漁撈具が注目され、また、玉生産などとの関与を想定させる鉄針状のものが目立つ。これらは播磨灘を臨む五斗長垣内遺跡とは機能、役割や立地の面でも異なり、纏向遺跡出現段階にも一部存続する点が重要だ。とくに出土土器の中には、擬凹線文系土器様式に特徴がある日本海系土器、北近畿系土器の器台などの遠隔地の土器が微量含まれており、近畿地方における南北交流関係が陸域・海域を超えて進んでいることが考えられる。それは鉄器や玉など生産技術者レベルの少数者交流であったことも想定し得、大変興味深い所見となる。

○以上のように、丘部全体の遺構配置は各所で機能的な様相を示し、分割区の空間ごとに異なった役割を有した中心施設が明らかになってきたように思われる。淡路島島内では閉鎖性が感得される地形空間にある舟木遺跡が、古墳出現前の時期の生産活動・祭祀活動や

## 配布資料 5 - 3

遠隔地との技術交流などの諸点において、島全体の中で後期集落の拠点性を示し、活発な動きを示していたことが明らかになってきたわけで、その意義は西日本の中でも異色で大きな歴史的意義を備えた遺跡であると思う。

【問い合わせ 連絡先】 自宅電話・FAX（共通） 0797-23-6674

メールも可能 morioka\_0223@yahoo.co.jp ※ \_は、下付きです。

【参考文献】 森岡秀人 「近畿地域」『講座日本の考古学』 弥生時代（上） 青木書店 2011年

森岡秀人 監修・編『古代学研究』 218号 淡路考古学特集号 2018年

## 舟木遺跡発掘調査成果に関するコメント

## ① 絵画土器の発見

・ 絵画土器とは線刻で絵が描かれた土器のこと。

★この度発見の絵画土器は、壺形土器の小片（約4 cm四方）の為、詳細は明確にし得ないが高床式建物の一部かと思われる。（2重線で表現された床に、梯子が架かる様子を描いたもの？）

・ 絵画土器は淡路島では3例目の発見である。いずれも弥生時代後期のものである。

・ 他の2例

- ・ 飛谷遺跡（洲本市五色町広石下） 高床式建物 2棟 壺形土器
- ・ 五斗長垣内遺跡（淡路市黒谷） 鹿？ 高坏脚裾部

## ○絵画土器発見の意義

絵画土器は、祭祀儀礼に用いられる土器、特に壺形土器に描かれる場合がほとんどで、どの遺跡からも普遍的に出土するというものではない。高床式建物や鹿は、絵画土器の中でも最もポピュラーな絵柄といえるが、それは豊穰と安定的な狩猟の祈りに用いられたといわれていることから、舟木遺跡においても、農耕に関わる祭が行われていたことを知ることができる。

## ② 他に例を見ない器台形土器

・ 器台形土器とは、壺などを乗せる台のことである。器台は壺、甕、鉢、高坏などの日常容器と違い、出土点数が少なく、非日常的に、祭の時などにお供え物を入れた壺などを乗せる台として使われたなどと考えられている。

・ 器台が祭祀と不可分であるなら独特の器形の広がりともまよりは精神的な文化圏を表しているともみることが出来る。

・ 淡路には「淡路型器台」という淡路特有の器台がある、弥生時代後期後半に北淡路に出現し、古墳時代初頭には姿を消す。北淡路を中心に分布する山間地の弥生遺跡群と消長を同じくする。近年、大阪湾沿岸の遺跡や奈良盆地からも確認されている。

★さてこの度発見された器台形土器は、これまでと全く違ったタイプの器台で今のところ舟木遺跡特有の器台といえる。器台というよりは底の無い大形台付鉢といったところで、作りもこれまでの器台と比して粗製である。舟木遺跡独特の祭祀儀礼に使用されたものといえるかも知れない。

## ★ まとめ

絵画土器、舟木遺跡特有の器台は、いずれも祭祀儀礼と関わりのある出土物である。舟木遺跡の中心には巨石信仰で著名な岩上神社があり、その周辺からも弥生土器の出土が古くから知られている。岩上神社周辺の舟木の弥生集落における祭祀がいかなるものであったか、各集落と巨石信仰との関係、さらに鉄器製作と祭祀との関係など、今後の調査により次第に明らかになっていくことだろう。

浦上雅史（洲本市立淡路文化史料館専門委員）

2019. 2. 5

